みつかる。つながる。よくなっていく。

毎月10日発行　第812号（通巻1316号）

東京YMCA

5
2024

創立1880年
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田２－３－18
日本キリスト教会館６階
Tel　03-6302-1960
URL　http://tokyo.ymca.or.jp
発行所　公益財団法人
東京ＹＭＣＡ
発行人　菅谷 淳

東京ＹＭＣＡの使命　東京ＹＭＣＡは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

第２回 ウクライナＹＭＣＡ支援活動報告会

ウクライナ各地域で2,600人がキャンプに参加

２０２２年２月にウクライナの平和が奪われて以降、東京ＹＭＣＡは20年以上交流を持つウクライナＹＭＣＡと頻繁に連絡を取り合い、これまでに合計５５，０００ドル（＝約７６５万円）を送金するなどの支援を続けています。

東京ＹＭＣＡは、４月16日にオンラインで２回目の「ウクライナＹＭＣＡ支援活動報告会」を開催。東京以外のＹＭＣＡからの参加も含め日本から約40人、ウクライナＹＭＣＡから約20人のスタッフや会員が参加しました。今回は、前回の報告会（２０２２年12月14日）以降に送金した２５，０００ドル（＝約３４６万円）の使途が報告され、たくさんの写真や動画から子どもたちの笑顔が見られました。

以下は、ウクライナＹＭＣＡからの報告をまとめたものです。

ＹＭＣＡキッズ（クロピヴニツキー）のデイキャンプ

ＹＭＣＡハルキウのウィンターキャンプ

目的は「心のケア」

東京ＹＭＣＡが２０２３年２月以降に送金した２５，０００ドルを用いて、ウクライナＹＭＣＡ同盟が２つのプログラムを、ウクライナ各地域のＹＭＣＡが16のサマーキャンプと６つのウィンターキャンプを実施。合計２，６００人が参加しました。参加したのは、戦争で家族を失ったり、国内避難民となったり、親が戦争業務に携わる子どもなどで、戦闘が激しい地域では地下のシェルターで行われたキャンプもありました。キャンプごとにテーマが設定され、子どもたちの心のケアのためにさまざまなアプローチがなされました。（下表参照）。

子どもたちがリラックスできる機会

キャンプに参加したリーダーやスタッフからは「ウクライナの子どもたちにとって、リラックスしたり新しい友だちを作ったりする機会になった。」「日本の支援のおかげで、ウクライナの子どもたちが希望をもって将来に向かっている。参加した子どもたちはとても感謝していて、次のキャンプも楽しみにしている。」との話がありました。

東京ＹＭＣＡの支援に感謝

戦争により親を失い、キャンプ参加費が払えない子どもたちも多くいます。ウクライナＹＭＣＡのビクター総主事からは、東京ＹＭＣＡの支援のおかげでプログラムが実施できたことへの感謝の言葉が寄せられ、今後の活動への協力継続の依頼がありました。ウクライナＹＭＣＡは、今後、心のケアのためのキャンプ、子どもたちへの心理学的なサポート、スポーツ活動、母と子のキャンプやイベントなどが必要と考えています。

ＹＭＣＡ-ＫＲ（クロピヴニツキー）のデイキャンプ

「ＹＭＣＡらしい活動」

また、日本側の参加者からは「ウクライナＹＭＣＡのスタッフの生の声が聞けて良かった。」「キャンプが子どもたちへの良い支援になっていることを知り、ＹＭＣＡらしい活動だと感じた。」「東京ＹＭＣＡとのつながりが深く、大変大きな支援をしている状況が具体的に理解できた。」などの感想が寄せられました。

残念ながら、まだ戦争の終わりが見えません。これからもウクライナＹＭＣＡの活動をサポートしていくため、引き続き募金のご協力をお願いいたします。

（国際・総合教育事業部　松本数実）

募金はこちら

東京ＹＭＣＡとウクライナＹＭＣＡのクリスマス交流

15年以上続く両ＹＭＣＡの子どもたちによるクリスマスカード交流。2023年度はインターナショナルキッズガーデンの園児、東陽町と山手のキッズ英語クラスの子どもたち、高等学院（通信制高校）の生徒が作成したクリスマスカード、ポスター、写真などを贈りました。さらに、子どもたちがクリスマスソングを歌う動画をウクライナＹＭＣＡと共有するなど、さまざまな形で気持ちを届けました。

そして2023年12月21日、ウクライナからもたくさんのクリスマスカードとお菓子や写真などが無事に届きました。

多くの方のご協力により、遠く離れた地であるウクライナと心がつながったような、温かく素敵な交流ができました。

東京ＹＭＣＡからのカードや写真などを受け取ったウクライナＹＭＣＡスタッフ

東京ＹＭＣＡに届いたウクライナの子どもたちからのクリスマスカード

＜東京ＹＭＣＡの支援により実施されたプログラム＞

実施ＹＭＣＡ	実施時期	内容
ウクライナＹＭＣＡ同盟	2023年５月	リーダーを対象に、キャンプリーダーとしてのスキルや知識を向上させるトレーニング
	2023年６月	ファミリーを対象に、セラピーやゲームなど心のケアを目的としたキャンプ
ＹＭＣＡクレメンチューク ＹＭＣＡリビウ ＹＭＣＡハルキウ ＹＭＣＡキーウ ＹＭＣＡリブネ ＹＭＣＡザポリージャ 他、５ＹＭＣＡ	2023年６月～８月	**＜サマーキャンプ（デイキャンプ）＞** ４歳～35歳が対象（キャンプにより異なる）。ペーパークラフト演劇、アートセラピー、救急法トレーニング、音楽療法、動物介在療法、スポーツ、ディスカッション、プール、遠足、ゲーム、人間関係づくりのトレーニング、将来に向けての消防士・パティシエ・金融家らとの懇談など
ＹＭＣＡリブネ ＹＭＣＡジトーミル ＹＭＣＡハルキウ 他、３ＹＭＣＡ	2023年12月～ 2024年１月	**＜ウィンターキャンプ（デイキャンプ）＞** 病院で入院治療中の子どもなど、６歳～18歳が対象（キャンプにより異なる）。クリスマスの話や歌、影絵作りなど

赤▽三角

私は英語が苦手である。「モラル」と「モラール」が違う意味だと知ったのは最近だったし、「ステレオタイプ」も純粋に英語だと思っていた。「ダイバーシティ」や「インクルーシブ」も最初聞いたときは何のことかさっぱりわからなかった。相手に聞くのも何となくはばかられたし、意味をいちいち調べていては話から取り残されてしまう。▼あえてわかりにくいカタカナ語を使う良さもある。適切な日本語訳がない場合でもすぐに使い回すことができるし、新しさ感を強調できたり専門的な感じを出したりすることもできるからだ。しかし、余りなじみがない外来語や専門用語は、時に相手との間に溝をつくり拒絶感すら与えてしまう時もあるのではないか。▼ペンテコステは、聖霊によって強められた弟子たちが、様々な言葉で、たくさんの人にわかるように福音を語り出した出来事だ。メッセージを一方的に発するのではなく、イエスの教えを一人ひとりに伝えて広めていこうと、最も伝わる言葉で語り出したのだ。▼私たちが抱く「思い」を多くの人に知ってもらうためにも、このペンテコステの故事に学び、更なる工夫が求められているのではないだろうか。（理事　石川　理）

YMCAからのメッセージ②

心豊かに〝より良く生きる〟

変わり続ける社会の中でも揺らぐことのないYMCAの価値を、その時々のメッセージとしてお届けします。

ウエルネス事業部
統括
松本　竹弘

健康とは

皆さんは幸せですか？2023年の世界幸福度ランキングで、日本は世界47位だそうです。この順位は低いのでしょうか。

最近、「ウェルビーイング（Wellbeing）」という言葉をよく聞くようになりました。東京YMCAの運営基本方針でも用いられています。

「Wellbeing」について語る時によく引用されるのが、1946年に設立された世界保健機関（WHO）の憲章の前文の一節です。Health（健康）の定義の中で「well-being」が使われています。「健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態（=Well-Being）にあることをいいます」（日本WHO協会仮訳）。

〝私の〟ウェルビーイング

「ウェルビーイング」が注目されるようになると、「健康」とは単に病気かどうかだけで考えるのではなく、もっと広義的になってきました。YMCAの使命は「みんなが健康になること、みんなが幸せになること」であり、より生き生きとした人生を目指す積極的な生き方をYMCAでは「ウエルネス(Wellness)」と表しますが、「ウェルビーイング」も「ウエルネス」と同様の意味を持つ概念として広く使われるようになりました。心身だけでなく、社会的な面も含め「満たされた状態が持続すること」がポイントです。一人ひとりの気持ちや実感を大切にする概念ですので、他者との比較ではなく、一人ひとりにそれぞれのウェルビーイングがあると思います。

「心の豊かさ」が基準に

近年「ウェルビーイング」をよく耳にするようになった要因や背景について考えてみると、「モノ」から「心の豊かさ」へと価値観が変化してきたことを感じます。特にコロナ禍では、さまざまな変化を多くの方が感じたのではないでしょうか。効率性重視の現代生活を見直し、自然や食べ物、文化、歴史、伝統などを大切にしながら丁寧に暮らす「スローライフ」を楽しむ人たちが増えてきました。また、健康、癒し、地球環境に配慮した「ロハス」に象徴されるような、心豊かに暮らす生活スタイルもよく聞きます。さらに、仕事と家庭、余暇、自己啓発など、心豊かな生活を実現するためにはワーク・ライフ・バランスの実現が当たり前の世の中になってきました。

子どもはプロセスも重要

子どものウェルビーイングはどうでしょうか。いつも楽しいことばかりではなく、怒ったり、落ち込んだり、イライラしたりすることもあります。大切なのは、このような時、どのように怒りを鎮めるのか、イライラを解消するのか、自分の気持ちにどの様に向き合えば良いのか、ツボやコツを見つけて実行することです。いろいろな発見や気づき、気持ちの変化など、良い状態に向かうその過程も子どもにとってはウェルビーイングではないでしょうか。また、自分のことだけでなく友人との関係や社会とのつながりも重要です。

楽しく高める

YMCAには、スポーツをしたり、家族でイベントに参加したり、ボランティア活動をしたりなど、子どもから大人まで楽しくウェルビーイングを高める機会がたくさんあります。身体を動かすものでは、子どもたちのスイミングや体操、テニス、サッカー、バレエなど、どれも楽しく取り組める工夫がなされています。また、技術の習得も大事ですが、それだけではありません。例えばスイミングではこれから夏の季節を迎えるにあたり、水上安全のプログラムを展開していきます。これは、自分のいのちと仲間のいのちを守るため、川や海、プールなどで安全に楽しく遊ぶために実施しています。

YMCAキャンプ＝ウェルビーイング

特に、YMCAのキャンプはウェルビーイングの要素が詰まっています。キャンプでの子どもたちの成長の過程はあらゆる場面にあり、ボートや野外調理などのプログラムだけでなく、仲間と一緒に過ごす時間（食事や風呂）、ベッドで一日を振り返る時間など、さまざまな場面や体験の中から成長の糧を得ることができます。よい仲間と出会うこと、自分に向き合うこと、新しい価値観に出会うこと、奉仕する喜びや主体的な参画など、キャンプは子どもたちの成長にとって有効なプログラムです。

私たちは、ウェルビーイングを実現する人々を増やし、地域社会が健康になっていくことを目指します。YMCAで自分にとってのウェルビーイングが見つかるといいですね。

能登半島地震

東京YMCAの避難所支援活動を振り返る

東京YMCAは、1月24日から輪島市町野町の2つの避難所支援を開始。延べ31人のスタッフがリレー形式で現地に赴き、3月末まで活動しました。4月より全国YMCA協働でスタッフを派遣する体制に移行し、支援を継続しています。

今号では、東京YMCAが避難所で活動した68日間を振り返りました。

変化していく避難所に、寂しさを感じる避難者も

1月に何もないところからスタートした避難所でしたが、全国各地からの支援や東京YMCAが募金を用いて購入し届けた支援物資などにより、2月には少しずつ人々の生活が落ち着いてきた様子でした。

2月末には避難所の炊き出しを担っていた方、口腔ケアや体操など健康面をサポートしていた歯科医師、薬剤師などが避難所から離れました。

日々の地道な活動により、徐々に避難所の中で人々に求められる存在となった東京YMCAも、常駐スタッフが東京に戻り、3月からは3～6日ごとにスタッフが入れ替わる体制に変わりました。

避難所生活の疲れやストレスが出る頃。コミュニケーションを大切に

3月は、校舎内のトイレやシャワーが利用可能になったり、乾燥機が届いたりと、少しずつハード面も改善されました。昼間は仕事や家の片付け、各種手続きなどで出かける方が多いため、避難所はとても静かでした。

日々の生活が安定してきた分、周りに気を遣いながら生活するストレスや、仮設住宅に入居できるのかといった先の不安が大きくなっていました。そのような中、YMCAは、特にコミュニケーションや傾聴を大切にして心と心の交流に努めました。他にも、避難者の負担を少しでも減らせるように、スロープの修理、ゴミの整理運搬、引っ越しのお手伝い、テントの片付けなど、その時に必要とされることを見つけ、積極的に協力しました。

日課のトイレ掃除

避難所の受付業務

復興と新しいまちづくりを応援し続ける

3月半ば、『町野復興プロジェクト実行委員会』が立ち上がりました。町野地区唯一の診療所の大石医師は、「全く新しい能登、町野町を創っていくきっかけとしてこの地震を捉えたい」と語ります。「災害は、ありのままを受け止めるだけ」と話す住民の方とともに、力強く前を向いて歩き始めていることを感じます。

東京YMCAは、被災地の人々とのつながりを大切に、「寄り添う支援」「誰もひとりにしない支援」を心に留めながら、新しい能登のまちづくりを応援していきます。

最後に、皆さまから寄せられた募金と励ましによりこの活動が支えられていることに感謝し、引き続きのご協力をお願いいたします。

（広報室　小松佳子）

支援活動の詳細はホームページで。第２次支援募金を実施中

大石医師（左）と東京ＹＭＣＡ現地責任者の中里敦さん

輪島市町野小学校・東陽中学校避難所　東京ＹＭＣＡの主な働き（１～３月）

	避難所と周辺の出来事	派遣スタッフの働き（日常業務以外）
1／24(水)		避難所支援を開始
1／25(木)	自動手洗い器設置（循環式）	
1／26(金)	餅つき実施	
1／27(土)	能登里山空港開通	
1／29(月)	屋内土足禁止に変更	東京YMCAからの支援物資（電子レンジ、トイレスリッパ、清掃用品、下着など）設置
1／30(火)	町野小学校再開	
1／31(水)		避難所内土足禁止の対応（表示作り、下駄箱作りなど）
2／4(日)	中学校パティションと段ボールベッド設置	パティション等設置手伝い
2／5(月)	洗濯機設置。男女別洗濯物干し場設置	男女別洗濯物干し場設置
2／9(金)		小学校浄化槽工事手伝い
2／11(日)	大きめの地震あり	
2／15(木)		小学生避難者とカードで遊ぶ
2／16(金)		町野小ガラス窓設置手伝い
2／17(土)	小学校トイレ水道復旧	お風呂バス掲示作成
2／20(火)	小中避難所集約説明会	
2／24(土)	電柱取り換えによる停電	
2／28(水)	乾燥機設置	乾燥機設置手伝い
2／29(木)		バーベキューに長光寺と共同で飲み物を提供
3／1(金)	この日から炊出しがなくなる。追悼の集い	
3／2(土)	中学室内トイレ復旧	
3／7(木)	小学校更衣室がシャワー室に変更	
3／9(土)	東陽中学校卒業式	
3／11(月)		支援物資を運ぶスロープの修復
3／12(火)	仮設住宅の抽選発表はじまる	
3／14(木)	小学校エアドック４台設置、町野復興プロジェクト実行員会設立	
3／15(金)	町野小卒業式（卒業生８人）	祝電を送る。支援物資運び手伝い
3／20(水)	仮設住宅鍵引渡開始、強風のため自衛隊お風呂中止	仮設住宅移動に伴う手伝い（不要テント片付け他）
3／29(金)		日本YMCA同盟・富山YMCAへ引き継ぎ
3／31(日)		東京YMCAリレー支援終了

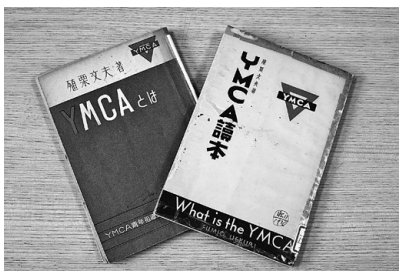
日常的な業務

避難所受付（小学校・中学校）	入退所受付、来訪者対応、給水対応、清掃・ごみ捨て　など
トイレ清掃（室内、屋外）	次亜塩素酸水作成、トイレットペーパーなどの補充
ラジオ体操	歯科医師などが実施していたサポート／３月よりＹＭＣＡのみで実施
換気	体育館内のＣＯ２濃度を下げるため
生活上のサポート	日々の声かけ、聞き取り、石油ストーブ給油、清掃、体育館内の支援物資整理　など

３月の避難所への派遣スタッフ

小畑貴裕／平塚朋美／熊谷　亮（国際ホテル専門学校）
松原愛作（社会体育・保育専門学校）
池田麻梨子／染井光優（語学教育）
江尻明子（南居場所事業）
玉田ゆき子（芝浦学童クラブ）
宮田　諭（山手ウエルネス）
池邊照彦（芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ）
佐藤信也／由井卓哉（YMサービス株式会社）
古市　健（財務部）
戸坂昇子／熊沢佳代（会員部）
小松佳子（広報室）

＊（　）内は2023年度３月時点の所属部署



シリーズ
資料室の窓から〈121〉
『ＹＭＣＡ読本』

本会元副総主事　**齊藤　實**

さきの戦争が終わって間もない１９４８年に、日本ＹＭＣＡ同盟は「ＹＭＣＡ青年指導叢書」を創刊し、その第１巻『グループ・デスカッション』を発行した。戦時中の言論統制から解放された自由を正しく身につける術を学ぶ書物であった。それから３年経った１９５１年３月に『ＹＭＣＡとは』を出した。著者殖栗文夫は言う。「ＹＭＣＡへ出入りすること既に30年になる。その間、夜学校（東京Ｙ英語学校）生徒、会員、主事また理事としてＹＭＣＡに関係し・・・ＹＭＣＡのことはよく知っているつもりであるが、なお〈ＹＭＣＡとは何か〉と問われて簡明に答えることは容易ではない」と。その書物の原型・前著作が『ＹＭＣＡ読本』である。太平洋戦争直前の１９３６年４月に教文館から出された。殖栗文夫は東京ＹＭＣＡ理事長であり教文館社長でもあった長尾半平の求めで１９３４年６月に教文館支配人に転じて２年、ＹＭＣＡ職員ではなくなった立場で、改めて「ＹＭＣＡとは何か」と自らに問うた。その答えとして「ＹＭＣＡに就いて静かに語り綴った」のがこの『ＹＭＣＡ読本』である。「決めつけ」ではなく、「乾いた説明」でもない潤いのあるこの極めて秀逸な「読み聞かせ物」を通して殖栗は語る。「ＹＭＣＡとは、平易に言えば基督教主義に依り青少年の向上発展の為に青、少年自身が自ら中心となって働く団体である・・その現れ方が時代とともに進んでゆくところにＹＭＣＡの真の面目がある」と。更に言う。「その活動があまり多種多様になったので、全体を一言を以て簡潔に言い表す事がなかなか困難になった」と。この好著の舞台となった日本は外地を持つ帝国であった。内地の市Ｙは札幌、仙台、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸の８か所と同盟。外地では「京城、大連、台湾、新京」。第２作である戦後の作品『ＹＭＣＡとは』では会館を持つ都市ＹＭＣＡ14。「現段階においては、・・・わが国では婦人を会員として扱うに至っていない」と書いた。扨て、老若男女が参画し加盟・準加盟34を数える今の日本国の都市ＹＭＣＡは多様な法人格で存在する。誰がどのように物語ってくれるのか。第３作が待たれる。

殖栗文夫氏

第11回平和展　「東京大空襲」体験絵画展を開催

平和といのちの大切さを訴える「平和展」を2024年３月４日～11日、東陽町センターで開催。今年は、隅田郷土文化資料館よりお借りした東京大空襲体験者の空襲体験画を展示し、大空襲体験者が語り部となって当時の惨状を伝えるビデオを上映しました。

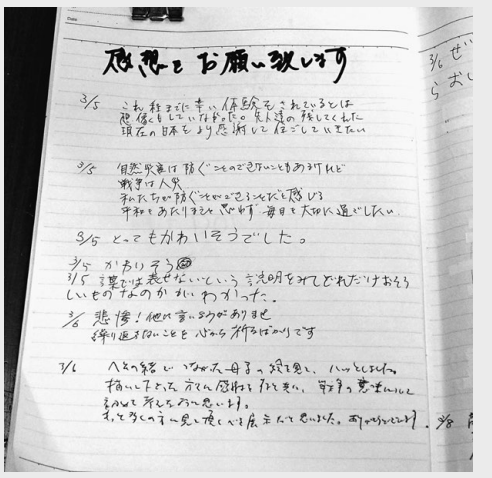
平和展の「感想ノート」より（抜粋）

●これほどまでにつらい体験をされているとは想像もしていなかった。先人たちの残してくれた現在の日本をより感謝してすごしていきたい。

●戦争は人災。私たちが防ぐことができることだと感じる。平和を当たり前と思わず、毎日を大切に過ごしたい。

●へその緒でつながった母子の絵を見て、ハッとしました。描いてくださった方々に感謝をすると共に、戦争の意味について初めて考えたように思います。もっと多くの方に見ていただくべき展示だと思いました。

●高校の教員をしています。毎年見させていただき、授業で語り継がせていただいています。二度とこのようなことが起きないよう尽力いたします。



それぞれの思いを記した「感想ノート」

江東センター

サッカーチーム「ペガサス」初の都大会出場！

2024年３月、江東センター・サッカーチーム「ペガサス」の３年生は、65チームで争うブロック予選を勝ち抜き、1980年の創立後初めて東京都少年サッカー連盟主催の中央大会（都大会）に出場しました。厳しい試合もありましたが、23人のメンバーとリーダー全員で一致団結して頑張りました。

総主事カフェ

東京ＹＭＣＡ総主事　**菅谷　淳**

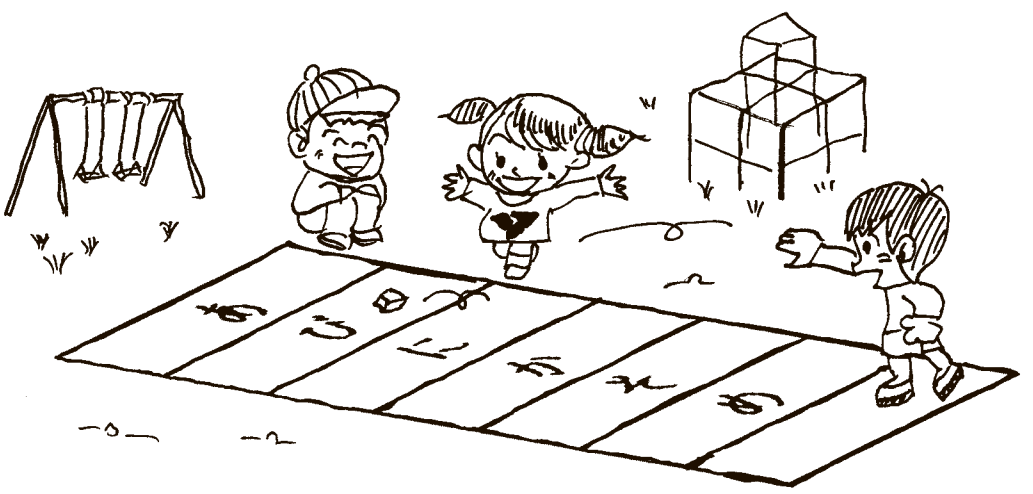
総主事カフェにようこそ。

皆さん、突然ですが「あびにかそめ」をご存知ですか？染物の一種ではありません。これ、私が小学生の頃に遊んだ外遊びの名称です。ネットで検索しても出てこないので、きっと新潟地方固有の遊びだったのかもしれません。今日は「あびにかそめ」を皆さんに紹介しましょう。まず公園や校庭に縦に１列で７つの連続したマスを書きます。ちょうどはしごの絵のような感じです。マスは歩幅くらいにします。そのマスに上から「あ」「び」「に」「か」「そ」「め」と１字ずつ書きます。７つ目のマスは空欄です。遊び方ですが、４、５人集まったら各々が小石を持ってじゃんけんし、順番に空欄のマスから文字に向かって自分の石を投げます。石がマスの外に出たら１回休み。その石が止まった文字の意味に従って６つのマスを１歩ずつ、枠線を踏まないように進み最後「あ」の外に出られたら成功です。

それぞれの文字の意味ですが「あ」は「歩き」です。これが一番楽なのでみんな「あ」に向かって小石を投げようとしますが、一番遠い「あ」にピタリと止めるのは難しいため、「あ」より手前のマスを確実に狙う人もいます。幸運にも「あ」に止まったらマスの線を踏まないように歩いて「あ」に行き、自分の小石を拾ってマスの外に出ます。さて、「び」は現代では差別用語となり使わなくなった「びっこ」なので足を怪我したジェスチャーをしながら進みます。「あ」より少しだけ難易度は増しますが、まあなんとか成功します。「に」は「荷物」。腰を曲げて歩き、小石を荷物のように背中に載せて進みます。「か」は「片目片足」。片目をつぶって片足でケンケンします。「そ」から難しくなります。「そ」は「空を向いて」なので上を向きながら勘を働かせて歩きます。周りの友だちは審判なので「あっ今線踏んだ」となると失敗です。「め」はご想像通り一番難易度が高いマスです。「目を閉じて」進むので大体枠線を踏んで失敗します。

さて、あれから50年以上経った今、ふとこの遊びは「福祉」を学ぶ上でとても良い教材だったなと思いました。まず「あ」ですが、歩くことは日常当たり前のことであり、特段ありがたさを感じません。しかし「あ」が選ばれると子どもたちは大いに喜び、胸を張って歩くことが嬉しくなります。次に「び」は怪我をすることを意味します。怪我が治るまでの不自由さを体験しつつ、最後に治ったことを喜びます。「に」は年老いて体の弱った高齢者のイメージです。元気に歩くことはできませんが、それでも最後まで小石を落とさないように頑張ります。「か」も「そ」も「め」も、それぞれ障がいのある人の生活と気持ちを体験します。人から教わるのではなく自発的に、そして遊びを通して弱い立場の人の気持ちを想像することは、その後の人格形成にとても有益だったと思います。

この遊びでもう一つ感心したのは、小学生低学年が加わった時に年長の子が彼らに配慮してあげていたことです。「ちっちゃい子は小石３回まで投げてもいいことにしよう」「１年生は全部歩きでいいよね」など、その場で新ルールを決めて年少者も楽しめるように便宜を図っていました。公平・平等の原則は大切ですが年齢や能力の差を越えてみんなで楽しく遊ぶためにはどうしたら良いか、子どもなりに知恵を出し合ったわけです。このような合理的配慮とそのベースにある相手を思いやる優しい気持ちは大人が意図して教えても簡単に芽生えません。そしてこのような遊びの機会が現代ではめっきり少なくなっていることも事実です。改めて、キャンプをはじめＹＭＣＡの体験活動には「あびにかそめ」のような自発的な成長の機会が随所にちりばめられているように感じて嬉しくなりました。


イラスト：菅谷　淳